

ヲシガ浦古墳

福岡県粕屋郡須恵町所在古墳の調査

序

この報告書は、昭和56年8月3日から同年8月11日まで、佐川急便株式会社の委託を受け、須恵町教育委員会が、福岡県教育委員会管理部文化課の発掘調査技師2名の派遣を受け、須恵町大字植木字ヲシガ浦にあった古墳の発掘調査を行なった、埋蔵文化財の記録です。

調査をした古墳の近辺には、既に粕屋町により発掘調査された古大間池遺跡の住居跡群や、福岡県によって調査された九州縦貫自動車道にかかる古墳群などがあります。

やむなく、公共目的のスポーツグラウンド建設のため破壊されたこの古墳も、その調査報告は、前出の報告書とともに必らずその成果が活用される事を信じます。

なお、報告書作製までの間、埋蔵文化財に対して深い御理解をいただいた佐川急便株式会社の各位、酷暑の中、現場作業に従事された調査技師、整理作業員及び地元の方々に、深く感謝の意を表します。

昭和57年3月31日

須恵町教育委員会

教育長 嵐末友三郎

例 言

1. 本書は佐川急便株式会社によるスポーツグラウンド造成に伴う事前調査として実施された緊急発掘調査の報告書である
2. 発掘調査は、須恵町教育委員会が佐川急便株式会社の委託を受け、福岡県教育委員会の協力を得て実施したものである。
3. 遺構の実測は、宮小路賀宏・井上裕弘・伊崎俊秋が、遺物の実測は鉄器を井上が、土器・玉類については中間研志・平田春美氏、製図は橋口達也・豊福弥生氏の協力を得た。遺構写真は井上が、遺物写真は平島美代子氏の協力を得た。なお、遺物整理にあたっては福岡県教育委員会岩瀬正信氏の協力を得た。
4. 本書の執筆は、1を宮小路、他を井上が行い、編集は井上があつた。

本 文 目 次

1. 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
3. 墳 丘	4
4. 石 室	6
5. 遺 物	7
6. おわりに	13

図 版 目 次

- 図版 1 (1)発掘前の古墳全景 南から (井上 裕弘 撮影)
(2)古墳全景 南西から (井上 撮影)
- 2 (1)石室全景 南から (井上 撮影)
(2)石室全景 北から (井上 撮影)
- 3 (1)玄室全景 西から (井上 撮影)
(2)玄室内遺物出土状態 (井上 撮影)
- 4 (1)玄室内耳環出土状態 (井上 撮影)
(2)玄室内玉類出土状態 (井上 撮影)
- 5 (1)奥壁石積み状態 (井上 撮影)
(2)東側壁石積み状態 (井上 撮影)
- 6 (1)玄門から羨道部近景 北から (井上 撮影)
(2)羨道東壁石積み状態 (井上 撮影)
- 7 出土土師器・須恵器 (平島美代子 撮影)
- 8 須恵器・鉄器・装身具 (平島 撮影)

挿 図 目 次

- 第 1 図 周辺遺跡分布地図 (井上 裕弘 作成)
- 第 2 図 発掘風景 (高山慶太郎 撮影)
- 第 3 図 発掘に参加した人達 (宮小路賀宏 撮影)
- 第 4 図 墳丘実測図 (宮小路賀宏・井上・佐藤正義実測, 豊福弥生製図)
- 第 5 図 墳丘土層断面図 (宮小路 実測, 豊福 製図)
- 第 6 図 墳丘土層断面 (井上 撮影)
- 第 7 図 石室実測図 (宮小路・井上・伊崎俊秋 実測, 豊福 製図)
- 第 8 図 出土土器実測図 1 (平田春美 実測, 豊福 製図)
- 第 9 図 出土土器実測図 2 (平田 実測, 須山富子 製図)
- 第 10 図 装身具実測図 (中間研志 実測, 豊福 製図)
- 第 11 図 鉄器実測図 (井上 実測, 橋口達也 製図)

表 目 次

- 表 1 玉類計測表 (中間 作成)

1. 調査の経過

当該発掘調査の端緒となったのは、佐川急便株式会社社員の福利厚生を目的としたスポーツ・グラウンド造成計画による。

計画の当初において、会社は須恵町教育委員会に文化財の有無について問い合わせ、町教育委員会は造成予定地の一地点に古墳と考えられるもののあることを指摘し、樹木伐採後改めて確認し、必要な処置について検討を行なうこととして協議がなされた。

伐採の完了した7月17日、町教育委員会の要請を受けた県教育委員会文化課は、主任技師木下修を現地に派遣し、古墳の遺存を確認するとともにこれの保護について町教育委員会及び佐川急便株式会社に申し入れた。

造成計画では、古墳の所在がグラウンドの中央部に位置することや、約8 m地下げを行わなければならないことから止むなく事前の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、調査に要する経費は会社に負担願ひ、8月3日から8月11の間に須恵町教育委員会が実施した。

調査関係者は次のとおりである。

須恵町教育委員会	教育長	嵐 末 友三郎
	社会教育課長	百 田 蔵 嗣
須恵町立歴史民俗資料館	館 長	浅 野 太喜彦
	主事補	高 山 慶太郎
	嘱 託	大 場 通 子
	嘱 託	野 尻 由 香
同資料館運営協議会	委 員	貝 原 稔
	同	安河内 文 作
	同	山 元 國 吉
福岡県教育委員会管理部文化課	調査第一係長	宮小路 賀 宏
	” 主任技師	井 上 裕 弘
	” 技師	伊 崎 俊 秋
佐川急便株式会社	代表取締役	赤 間 等 (前)
	同	境 保 (現)
佐藤工業株式会社福岡支店	工事主任	向 江 征 一
	主任技術者	高 橋 功

なお、調査に当っては、福岡県文化財保護指導員安河内乙氏の御協力があつた。



- | | | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|------------|-----------|
| 1. ラシガ浦古墳 | 2. 古大間池遺跡 | 3. 古大間池玉造遺跡 | 4. 葛葉古墳群 | 5. 焼地山古墳群 | 6. 井山古墳群 |
| 7. 西尾山古墳群 | 8. 上大隈古墳群 | 9. 脇田山古墳 | 10. 隈古墳群 | 11. 神の木古墳群 | 12. 馬転古墳群 |
| 13. 大間古墳群 | 14. 旅石古墳群 | 15. 久徳古墳群 | 16. 乙植木古墳群 | 17. 尾黒山古墳群 | 18. 城山古墳群 |

第 1 図 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

2. 位置と環境

ヲシガ浦古墳は、福岡県粕屋郡須恵町大字植木字ヲシガ浦に所在し、粕屋町との町境に位置している。

須恵町は東に宝満・三郡・砥石・若杉の各山が南から北へと連なり、西は四王寺山や月隈丘陵に挟まれた狭長な平野部に位置している。遺跡はその山麓や丘陵上に密集している。ヲシガ浦古墳は若杉山から続く標高85.8mの乙犬山西麓に伸びた独立丘陵上に形成されている。北側麓部には江戸時代の築塘と思われる古大間池・新大間池、西側麓部には駕与丁池など大小数多くの溜池が築かれている。

周辺の遺跡を概観すると、北側麓に弥生時代の住居跡群が発見された古大間池遺跡(註1)、古墳時代の玉造遺跡として知られる古大間池玉造遺跡がある。池を挟んで北側の丘陵上には葛葉古墳群・焼地山古墳群・井山古墳群がある。井山古墳群はすでに消滅した古墳群で、主体部が箱式石棺・礫床・石囲(?)・横穴式石室などとバラエティーに富む38基からなる群集墳であった。

西側の乙犬山北麓には大門・馬転・神の木・旅石などの数基からなる古墳群があり、南の岳城山西麓にはすでに消滅した城山古墳群をはじめ、柳坂・切通・尾黒山・尾黒南古墳群などが群在している。また、南約1kmの独立丘陵をなす天神山には天神山古墳群と乙植木古墳群がある。乙植木古墳群については、九州縦貫道建設に伴い、発掘調査がなされている。竪穴系横口式石室など古式の横穴式石室を主体部とし、銅鏡・刀・剣・手斧・鋏・鏝・鎌・鉈・鎌子・刀子・鉄鍬・銅釧など豊富な副葬品が検出されている(註2)。

一方、北側に目を転ずると、同じく九州縦貫道の調査で発見された西尾山古墳群(註3)をはじめ、上大隈古墳群、県指定史跡として有名な古式の円墳である平塚古墳、県内でも稀少の前方後方墳の部木八幡宮古墳などがある。



第2図 発掘風景

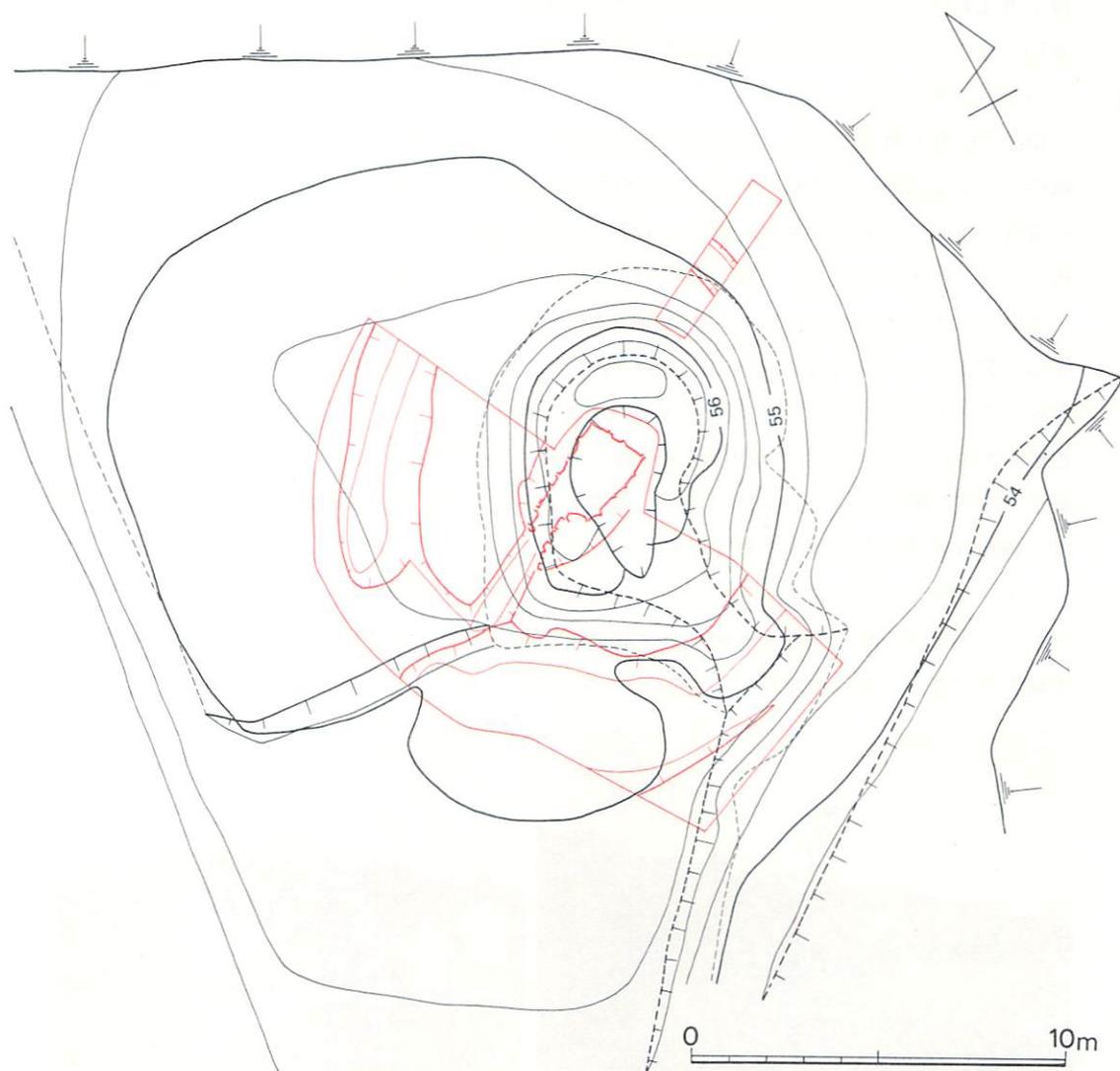


第3図 発掘に参加した人達

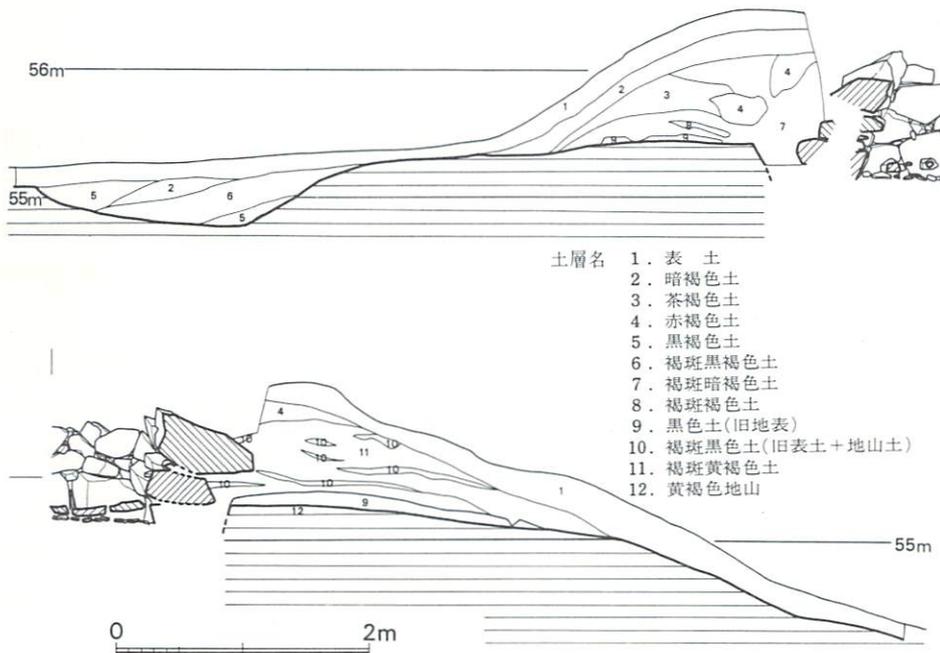
3. 墳 丘

標高56mの丘陵頂部に形成された円墳である。墳頂部には盗掘による陥没がみられた。墳形は盗掘と開削・盛土の流土等により南側に変形を呈し、一見前方後円墳を思わせるものであった。

みかけの墳丘の規模は南北8m、東西9m、高さは残りの良い東側で1.50mを測る。墳丘調査の結果、東西10.5m、南北10mで、周溝を含めた東西径は約15mを測る円墳であることが判



第4図 墳丘実測図 (1/200)



第 5 図 墳 丘 土 層 断 面 図 (1/60)

明した。

墳丘北側は開削が著しく、石室中心から3.5mを残すのみであった。墳丘の築造は旧表土上から開始されており、1 m程の土盛りを行っている。土盛りは茶褐色土・暗褐色土・赤褐色土を用い、厚く粗雑に積み上げ、石室の構築と並行して行っている。

周溝は墳丘西半部と東側一部で確認されており、溝上面最大幅南西側で3.7 m、底面幅2.5 m、深さ約30cmを測る。南西側が最も広く、東側は1 mと狭くなっている。墓道前面の周溝はとぎれ陸橋部を形成している。

周溝南側の外肩は地形の傾斜もあって消滅している。

周溝北側と西側の埋土中からは須恵品の甕・短頸壺・平瓶・提瓶・杯身・杯蓋、土師器の高杯等が出土した。



第 6 図 墳 丘 土 層 断 面

4. 石 室

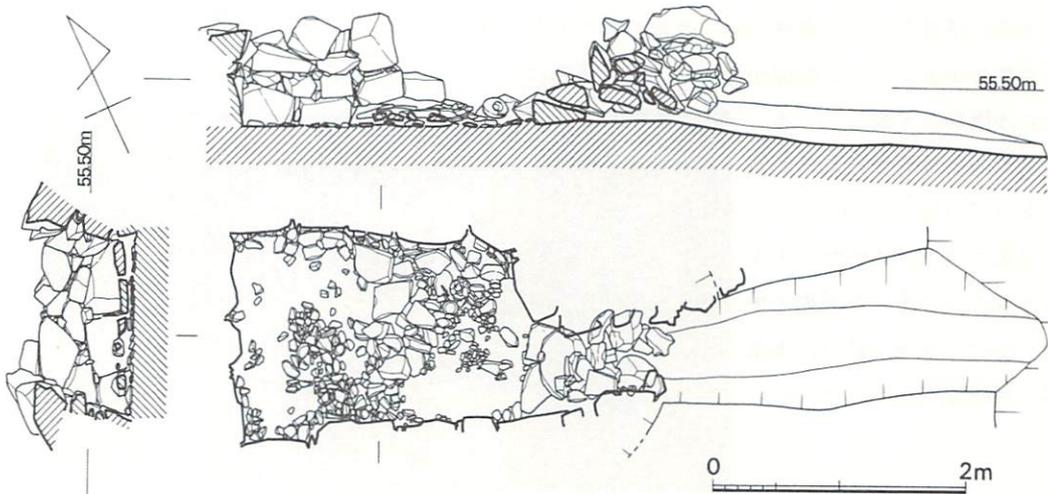
南西に開口した単室片袖の横穴式石室で、主軸方位はN-66°-Wを示す。盗掘により天井部は全く存在しないが、残存部からおおよその石室規模は復原しうる。

墓壇は旧表土面から地山を掘削して造られており、確認しえた西半部で幅2.8 mを測る長方形を呈すものと思われる。墓壇西側には主軸の延長上に幅40~57cm、深さ約25cmの素掘りの墓道が開鑿させられている。墓道は断面U字状を呈している。

玄室の平面形は羽子板状を呈すものであり、規模は、奥壁部幅1.60 m、袖石部幅1.20 m、主軸長2.30 mを測る。奥壁は腰石として幅35~60cm、高さ40cm前後の石材を3個用い、大小の石材で3段積みしている。腰石は地山を掘り込み垂直に据えているが2段目から15°の傾斜をもたせ持ち送り式に積み上げている。側壁は両壁とも25~60cm前後の横長の石材を腰石とし、5石を使用している。腰石上の石積みは大小さまざまな石を用い粗雑に積み上げている。側壁の石積みは3段~4段で、奥壁とは異なり腰石から内傾させる持ち送り式の積み上げで、北側壁で20°を測る。

袖石の幅は55cmを測り、仕切石は扁平な石2個を使用している。

石室の高さは残存部で床面より95cmを測るが、壁面の持ち送りの状態からみて、天井部までの高さはおそらく1.50 m前後となろう。床面には5~15cm前後、20~30cm前後の扁平な河原石を用い2段に敷石している。上段の敷石は下段に比べ大き目の石を用い、玄門部側にのみ遺存していた。奥壁側の上段の敷石は盗掘時に除去された可能性がある。上段の敷石は追葬時のもので、



第7図 石室実測図 (1/60)

袖部付近に須恵器平瓶2，杯身1，鉄斧1，刀子1が供献されていた。

また，奥壁中央腰石間に挟って鉄鎌1，北側壁に接し鉄鎌1，下段敷石上から銀環2，ガラス勾玉1，ガラス小玉77個，鉄鏃数本が出土した。他に滑石製勾玉1個が埋土中から検出された。

羨道部は左が0.75m，右が1.40mと短かいもので床面上より大小の石3～4段で積み上げている。全体に粗雑さがみられる。

墓道は石室の中軸線上西側に地山を掘削して作られており，長さ2.60mで，周溝陸橋部に達している。

閉塞は玄門部に接して行なわれ，これは床面に直接石材を置くのではなく，厚さ10cm前後の土砂の上に載せて封鎖している。

5. 遺物

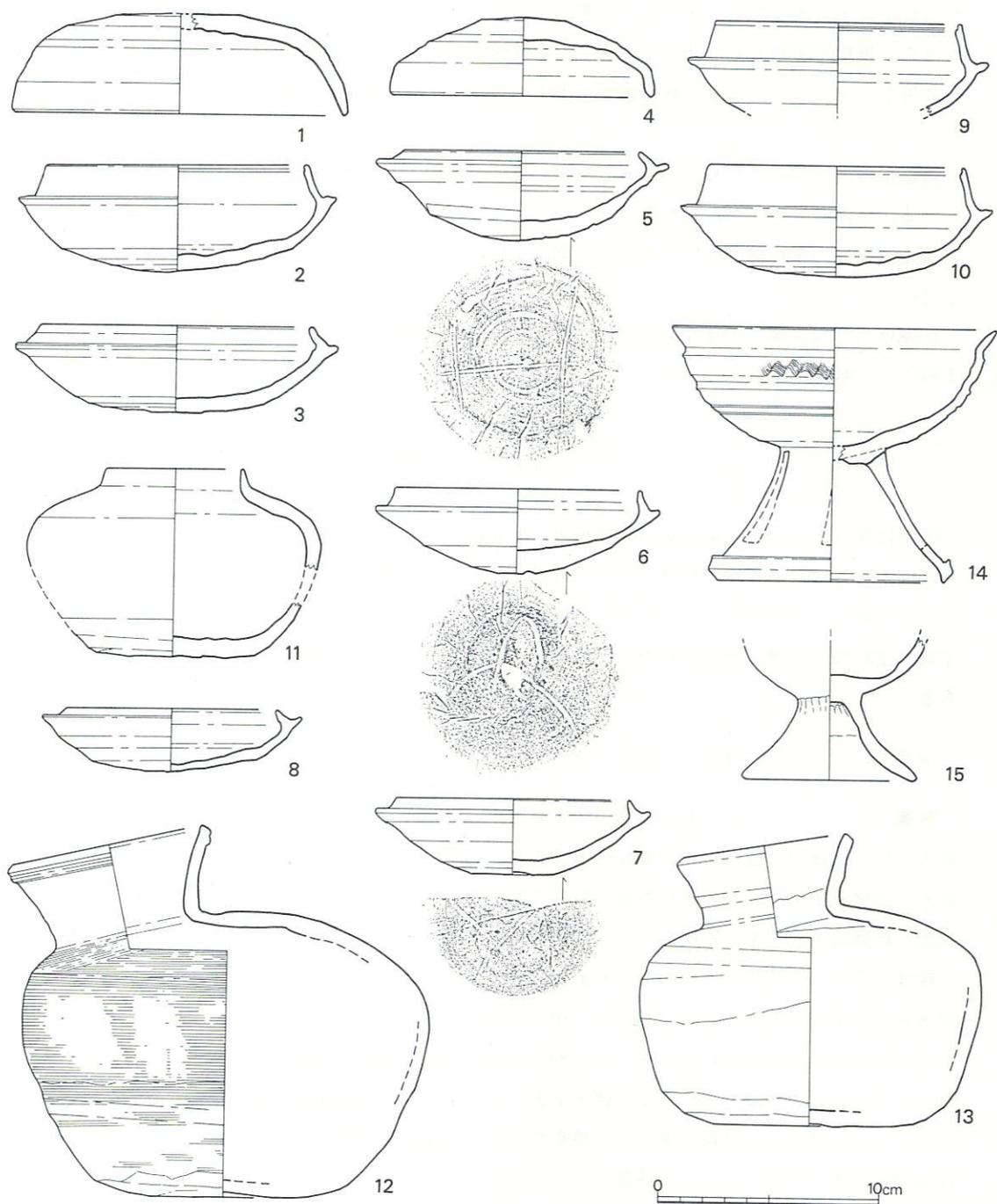
遺物は玄室内，北側と南西側の周溝埋土中と北西側墳丘中から出土した。袖部付近の追葬時の床面上から須恵器平瓶と杯身・鉄斧・刀子が，奥壁側下層敷石床面上から鉄鎌・鉄鏃と，装身具として銀環・ガラス勾玉・ガラス小玉等が散在して出土した。また，玄室内埋土中から十字金具・滑石製勾玉等が検出された。周溝内から出土したのは全て須恵器・土師器等の土器等である。

須恵器（図版7，第8・9図）

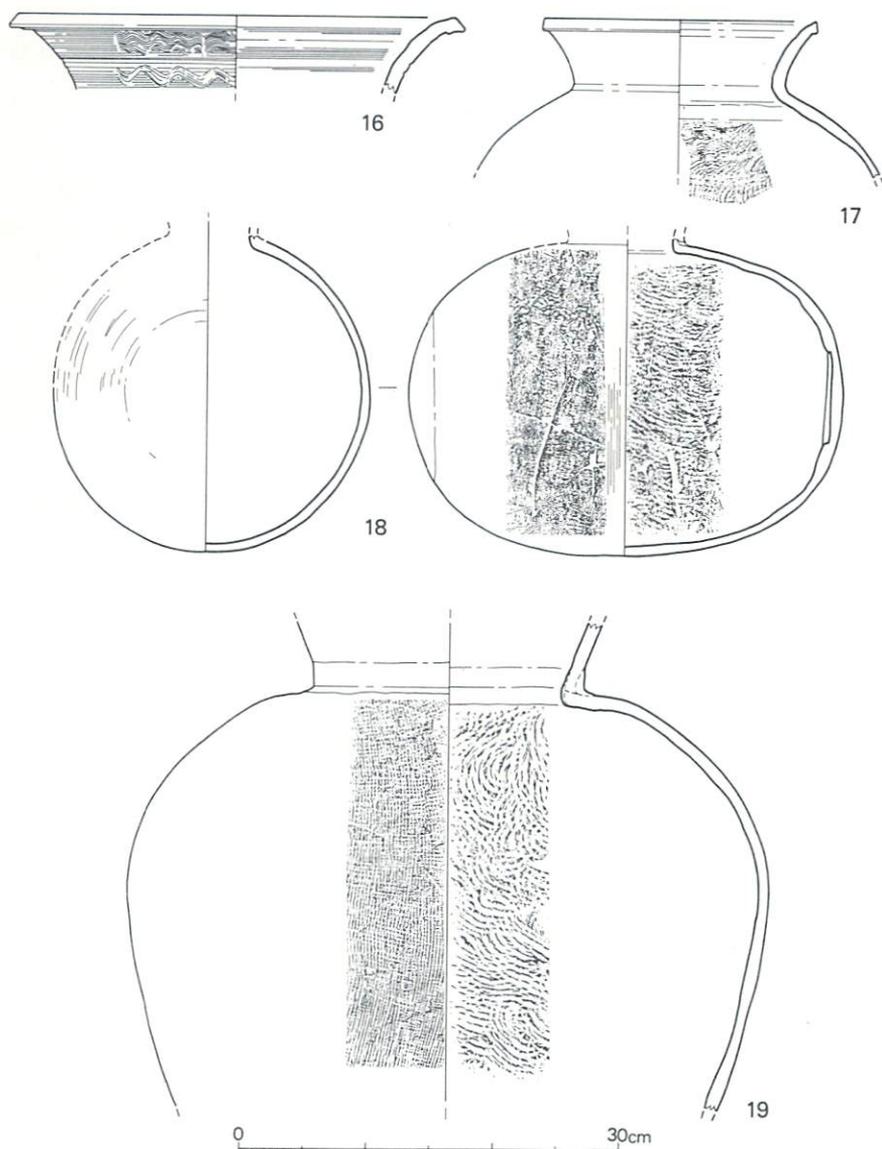
杯蓋（1・4） いづれも周溝埋土中から出土した。1は復原口径15.1cm，器高4.5cmを測る大型品で，体部の屈折が不明瞭な杯蓋である。4は復原口径12cm，器高3.5cmを測る小型品である。調整は1・4とも天井部外面回転ヘラ削り，内面ナデ，体部内外はヨコナデで仕上げている。色調は1がくすんだ灰色，4が緑灰色を呈す。

杯身（2・3・5～10） 大中小があり，2・3・10が大型，5～7・9が中型，8が小型である。口径は大型品が11.6～12.2cm，中型品が10.5～11cm，小型品が9.5cmを測る。器高は大型が3.9～5cm，中型が3.4～4.1cm，小型が2.85cmを測る。調整手法は，外底部回転ヘラ削り，内面ナデ，体部内外はヨコナデ仕上げである。2・9・10の口縁端部内面に1条の凹線がめぐり，9・10の立ち上りは強く高いのが特色である。色調は2が青灰色，3が灰色，5が黒灰色の他は暗灰色を呈す。5～8の外底部にはヘラ記号がみられる。

短頸壺（11） 直口する短頸の平底の小型壺である。復原口径6cm，器高8.4cm，底径7.6cmを測る。器面全体に灰かぶりがみられ，肩部に蓋をかきねて焼いた痕跡を残している。外底部付近回転ヘラ削り，内底部ナデ，体部内外ヨコナデで仕上げた暗灰色を呈す作りの良い土器で



第 8 图 出土土器实测图 1 (1/3)



第9図 出土土器実測図2(1/6)

ある。

平瓶 (12・13) 大小あり、口径12が8.7cm, 13が7.3cm, 器高12が16.5cm, 13が13.1cm, 胴部最大径は12が18.3cm, 13が15.4cmを測る。調整手法は12が胴部外面カキ目で, 13はナデで仕上っている。色調は12が暗緑色を呈した灰色で, 13は茶褐色から暗灰褐色をなす。

提瓶 (18) 口頸部を欠失する資料で, 胴部最大長34cm, 幅25cm, 残存器高24.2cmを測る。調整は外面タタキのあとカキ目を施すが, 灰かぶりのため不明瞭になっている。内面青海波の

タタキである。色調は暗灰色から黒灰色を呈す。

高杯 (14) 破片資料である。方形のスカシを4個もつと思われる脚部に椀形の杯部がつくもので、杯部上面凸帯間に櫛描き波状文が施されている。色調は暗灰色を呈す焼成良好堅緻な高杯である。復原口径14.5cm、器高11.3cm、脚部径10.2cmを測る。

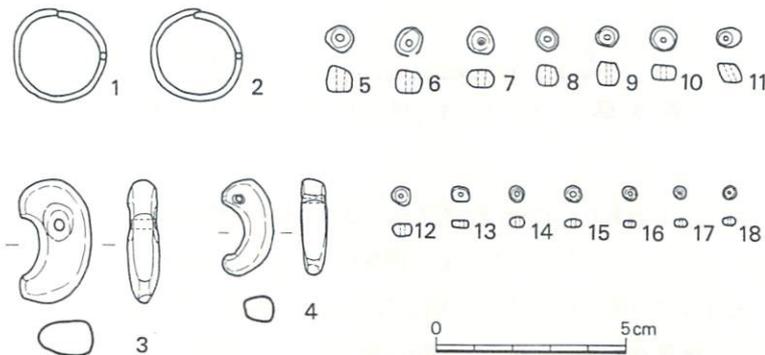
甕 (16・17・19) いずれも破片資料である。16は口縁部付近の破片資料で、外面に2条の凹線文と櫛描き波状文を施している。調整は内外ともカキ目、口縁端部付近はヨコナデで仕上げている。色調は暗灰色。復原口径34.4cmを測る。17は胴上半の資料で、復原口径21.4cmと小型である。外面全体に自然釉のかぶりが見られ、調整不明。胴部内面青海波タタキのあと部分的にナデで、口縁部内外はヨコナデしている。色調は頸部外面黒灰色を呈すが、胴部は黄土色をなす。焼成は良好・堅緻である。19は口縁部と底部付近を欠失する破片資料である。復原胴部最大径50.2cmを測る大型品である。調整は胴部外面平行タタキ、内面青海波のタタキで仕上げている。頸部内外はヨコナデである。色調は青灰色から灰黒色を呈す。外面全体に灰かぶりが見られる。

土師器 (図版7, 第8図)

高杯 (15) 杯部口縁を欠失する小型の高杯である。脚部は短かくラッパ状をなし、椀形の杯部がつくものと思われる。脚部径8cm、現存器高7cmを測る。脚部外面の一部にタテ方向のヘラ削りがみえる他は器面の風化が著しく調整は不明である。

装身具 (図版8, 第10図, 表1)

耳環 (1・2) いずれも細身の銅地銀箔張りの耳環である。1は外径2.5cm、断面1.5~2mmの円形。2は外径2.4cm、断面1.2~2mmの円形を呈す。若干の違いはあるが一對のものと思われる。



第10図 装身具実測図(1/2)

勾玉 (3・4) 3が滑石, 4がガラス製である。3は長さ32.1mm, 厚さ8.9mm, 重さ7.9gを測る。孔径は2.2mmで, 一方から穿孔されている。4は長さ24.8mm, 厚さ6.8mm, 重さ2.5gを測る。色調は青緑色を呈し, 穿孔は一方からで径1.9mmである。

小玉 (5~18) 全てガラス製の小玉で総数77個である。径3~7.7mm, 厚さ1.8~6.8mmと大中小がある。一般に4mm前後のものが最も多い。色調には濃紺色・紺色・水色の三種があり, 紺色がもっとも多い。玉類の計測値は表1に示す通りである。

表 1 玉 類 計 測 表

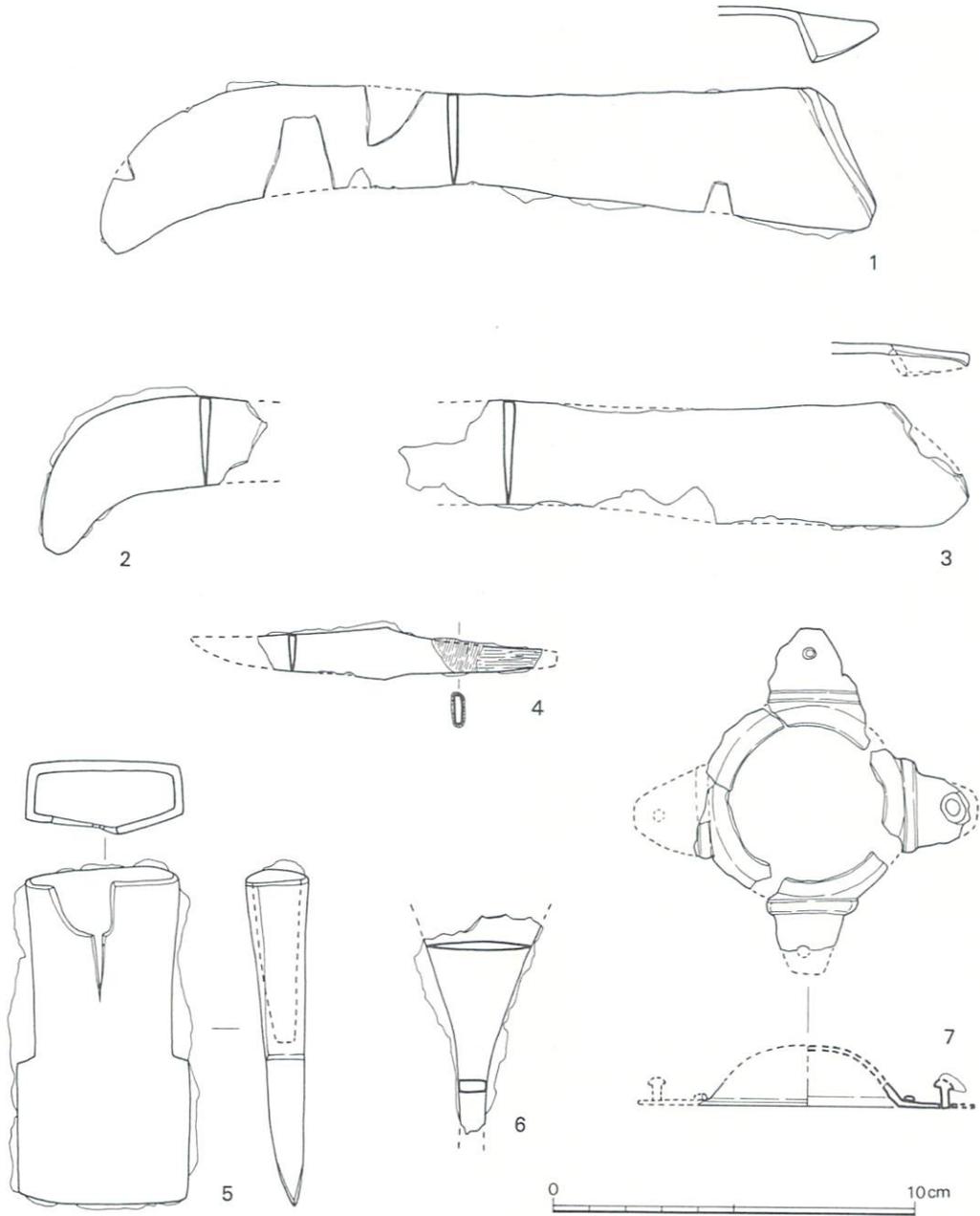
(単位 mm, g)

No.	種 類	色 調	径(長さ)×厚さ	孔径	重量	No.	種 類	色 調	径(長さ)×厚さ	孔径	重量
1	滑石製勾玉	淡緑白灰色	32.1×8.9	2.2	7.9	38	ガラス小玉	紺 色	4.8×3.2	0.7	0.1
2	ガラス製勾玉	青 緑 色	24.8×6.8	1.9	2.5	39	"	"	4.6×2.1	1.0	0.05
3	ガラス小玉	濃 紺 色	7.1×6.8	1.6	0.35	40	"	"	4.2×2.1	0.8	0.05
4	"	紺 色	7.7×6.0	1.4	0.4	41	"	水 色	5.0×3.0	1.1	0.1
5	"	濃 紺 色	7.0×4.2	1.1	0.3	42	"	"	4.8×3.2	1.0	0.1
6	"	水 色	6.1×4.7	1.1	0.2	43	"	"	4.3×3.8	1.0	0.1
7	"	紺 色	5.4×5.9	1.3	0.2	44	"	"	4.8×3.9	0.9	0.1
8	"	"	6.8×3.8	1.1	0.2	45	"	"	4.5×2.6	1.2	0.1
9	"	濃 紺 色	6.8×4.9	1.2	0.35	46	"	"	4.6×3.1	1.0	0.1
10	"	"	6.5×4.2	1.2	0.2	47	"	"	4.7×2.5	1.2	0.1
11	"	水 色	6.8×4.8	1.8	0.2	48	"	"	4.1×2.7	1.0	0.1
12	"	濃 紺 色	6.2×3.2	1.2	0.15	49	"	"	4.3×2.4	1.0	0.1
13	"	紺 色	5.1×4.95	1.05	0.25	50	"	"	4.3×2.5	1.0	0.05
14	"	濃 紺 色	5.05×3.65	1.0	0.2	51	"	"	4.0×2.5	1.0	0.05
15	"	"	4.75×1.8	0.8	0.1	52	"	"	3.9×3.0	0.8	0.05
16	"	淡 緑 色	4.0×3.15	1.2	0.1	53	"	"	3.9×2.2	0.8	0.05
17	"	水 色	4.2×2.1	1.4	0.1	54	"	"	3.9×2.2	1.0	0.05
18	"	濃 紺 色	3.6×2.0	1.0	0.09	55	"	"	3.9×2.0	1.1	0.05
19	"	水 色	3.3×2.15	0.8	0.05	56	"	"	4.1×2.0	1.0	0.05
20	"	濃 紺 色	3.35×2.15	0.6	0.05	57	"	"	3.5×2.1	0.7	0.03
21	"	紺 色	5.8×4.0	1.6	0.3	58	"	"	4.2×2.3	1.0	(0.1)
22	"	"	6.1×3.6	1.7	0.2	59	"	"	4.1×3.7	1.0	(0.05)
23	"	"	5.3×3.8	1.2	0.2	60	"	紺 色	4.3×2.6	0.8	0.05
24	"	"	5.3×3.2	1.8	0.15	61	"	"	4.3×2.9	1.2	0.1
25	"	濃 紺 色	5.5×4.7	1.2	0.25	62	"	"	4.9×2.9	0.8	0.1
26	"	"	5.7×3.8	1.3	0.2	63	"	"	4.1×3.0	1.0	0.1
27	"	紺 色	4.9×4.8	0.9	0.25	64	"	"	4.1×2.7	1.1	0.1
28	"	"	5.5×4.1	1.1	0.28	65	"	"	3.9×2.8	0.8	0.05
29	"	"	5.7×3.1	1.1	0.2	66	"	"	4.4×2.1	1.0	0.05
30	"	"	4.2×3.9	1.6	0.15	67	"	"	3.9×2.5	0.8	0.05
31	"	"	5.2×2.8	1.0	0.1	68	"	"	3.9×2.8	1.0	0.05
32	"	"	5.1×4.6	0.7	0.1	69	"	"	3.7×2.4	0.8	0.05
33	"	"	5.0×2.7	1.0	0.1	70	"	"	3.8×2.2	0.8	0.03
34	"	"	4.7×2.7	1.2	0.1	71	"	"	3.2×2.1	0.6	0.03
35	"	"	4.8×2.7	1.3	0.1	72	"	"	3.0×2.5	0.6	0.03
36	"	"	4.7×3.1	1.1	0.1	73	"	"	3.0×2.2	0.5	0.03
37	"	"	4.5×3.2	0.7	0.1						

*表に示した他に小類の小玉, 約四個体分あり(水色)

鉄器（図版 8，第11図）

鉄鎌（1～3） 1はほぼ完形品で、長さ21.4cm，刃部長17cm，中央部での幅2.5cm，背厚3



第11図 鉄器実測図 (1/2)

mmを測る。柄部の折り曲げはゆるやかである。2は切先部の資料で、身幅2.5cm、背厚3mmを測る。3は切先と柄部の大半を欠失するもので、現存長15.7cm、身幅2.9~3.1cm、背厚3mmを測る。2・3は接合する部分はないが同一の可能性があろう。

刀子 (4) 切先を欠失する資料で、柄部には木質が残存していた。現存刃部長3cm、身幅1~1.5cm、背厚2mmを測る。

鉄斧 (5) 袋部を有する有肩の手斧形鉄斧である。全長9.2cm、刃部長4.6cmを測る。袋部上面は長方形を呈す。

鉄鏃 (6) 先端を欠くが圭頭広根斧箭式の鏃と思われる。現存最大幅3.3cm、身長6cmを測る。

辻金具 (7) 頂部と脚部の1足を欠失するが4足からなる辻金具である。脚部は鋌と帯により留められている。いわゆる馬具の飾り金具である。

6. おわりに

本古墳の調査の成果と問題点について若干触れ、まとめとしたい。

(1) 本墳の築造時期を決定する資料に周溝内出土の須恵器がある。しかし、それら資料中には明らかに年代的に隔たりをもつものがあり、それは第8図の2・9・10の杯身と11の高杯でこれまでの編年からすれば6世紀前葉の年代が与えられる。

ところが、他の大半の資料は6世紀後葉~7世紀初頭に比定され、半世紀近くのはらきが生じてしまう。石室内の敷石は2層からなり、明らかに追葬されていることは事実であるものの年代的な空白が大きすぎ追葬の考え方もむずかしい。それをあえて解釈すれば6世紀後葉以降にこの古墳を再利用したと理解することも可能だが、これまでの類例からそれは考え難い。また、石室の構造が小規模で、石室の石積みも終末期古墳特有の粗雑なものであり、首肯しえない。むしろ、これら古式の須恵器はいずれも小破片の資料で、周辺にこの時期の別な遺構が存在した可能性を考えたほうが妥当のように思われる。

従って、本墳の築造時期は第8図3の杯身が示す6世紀後葉に位置づけておきたい。また、玄室内袖部付近に供献された土器類は明らかに6世紀末から7世紀初頭に位置づけられ、追葬が行われていることが判る。それはまた、玄室内に敷かれた敷石が二段になっていることからもうなずける。少なくとも一回の追葬が考えられよう。

(2) 石室の構造についてもすでに触れたが、片袖単室の小規模な横穴式石室である。石室の石材も腰石に大きめのものを使用しているが、上段の石積みは大小さまざまで、また、かたちも不揃いのもが多く粗雑さが目立つ。羨道も短かく終末期古墳特有の構造を示している。

(3) 副葬品の内容は盗掘を受けているため不明な点が多いが、辻金具1・耳環2・勾玉2・

ガラス小玉77・鎌2～3・鉄斧1・刀子1・鉄鏃数本・不明鉄器(刀?)・平瓶2・杯身1などかなりの量の副葬品が出土した。また、奥壁側の敷石には多くの乱れがみられ、他にも多くの副葬品が存在した可能性はあろう。

(4) 前記したように6世紀前葉頃の遺構が存在した可能性はある。しかし、丘陵尾根上を試掘した限りでは古墳等の存在は知られていない。従って、土壙等の小規模なものかもしれない。

その意味では、本古墳は単独墳といえる。周辺の古墳群のあり方をみると、葛葉古墳群(2基)、上大隈古墳群(3基)、脇田山古墳(註4)、隈古墳群(2基)(註5)、大門古墳群(2基)、馬転古墳群(2基)、袖の木古墳群(2基)、旅石古墳群(2基)、久徳古墳群(2基)などと1基ないしは数基(多くて3基)からなる小単位の古墳群が散在し、10数基と群集する焼地山古墳群や井山古墳群の縁辺部に分布している。このような事象をただちに従属的関係の反映とするには多くの問題を残すものの、可能性のあることと思われる。今後、この地域の古墳時代終末期の共同体構成を知る上で必要となる検証であらう。

註(1) 佐々木隆彦「古大間池遺跡」柏屋町教育委員会 1977

(2) 石山勲他「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第10集 福岡県教育委員会 1977

(3) 石山勲「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第30集 福岡県教育委員会 1979

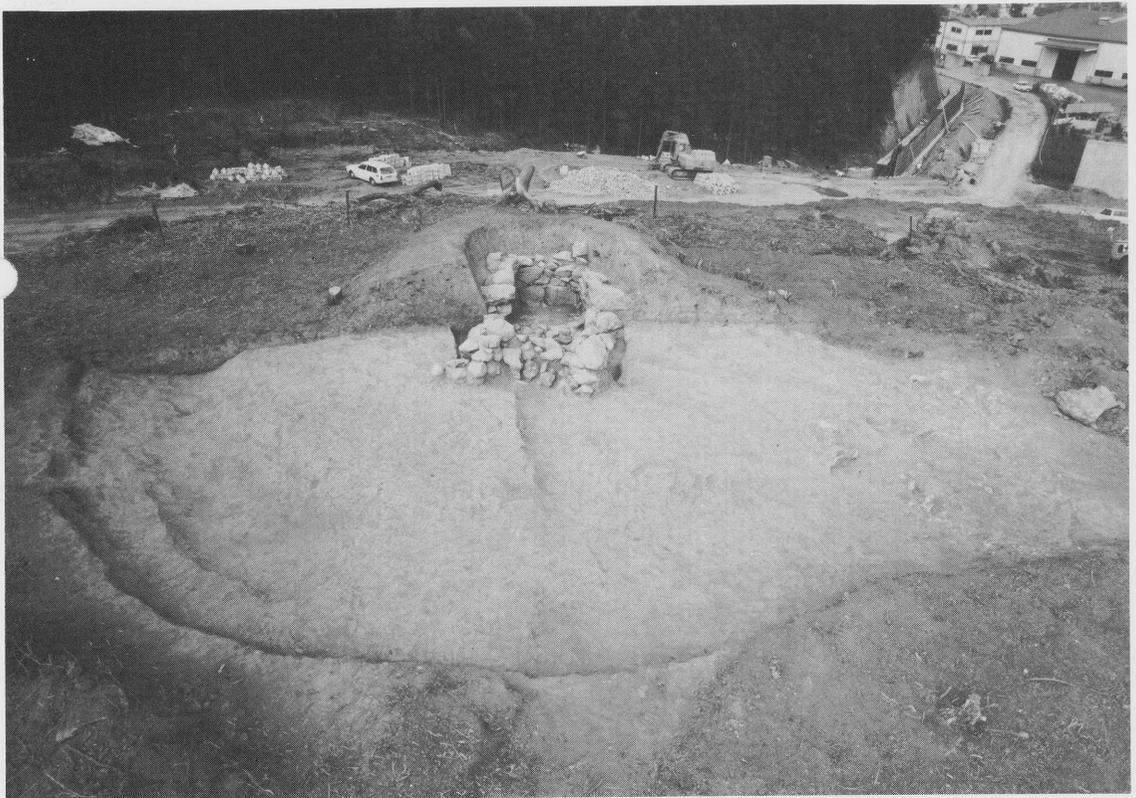
(4) 松岡史「佐谷・脇田山・古墳調査報告」福岡県教育委員会 1974

(5) 川述昭人他「隈遺跡」篠栗町文化財調査報告書 第1集 篠栗町教育委員会 1981

版 図



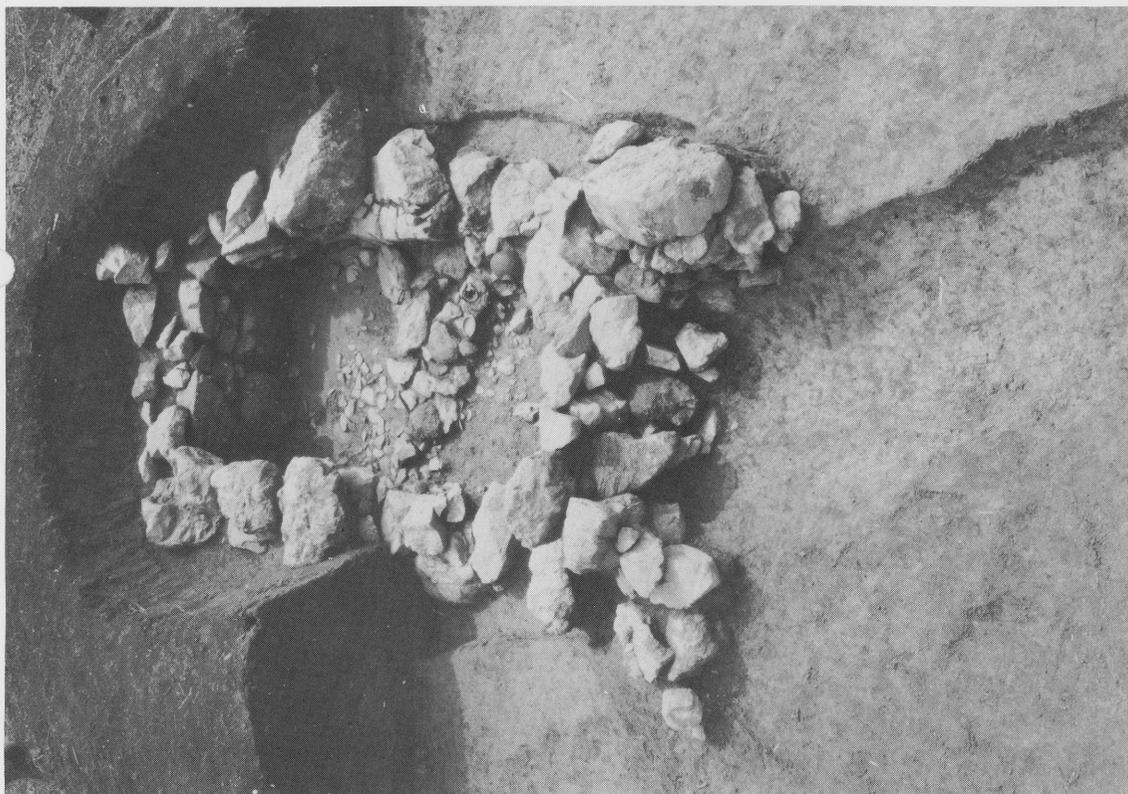
1. 発掘前の古墳全景(南から)



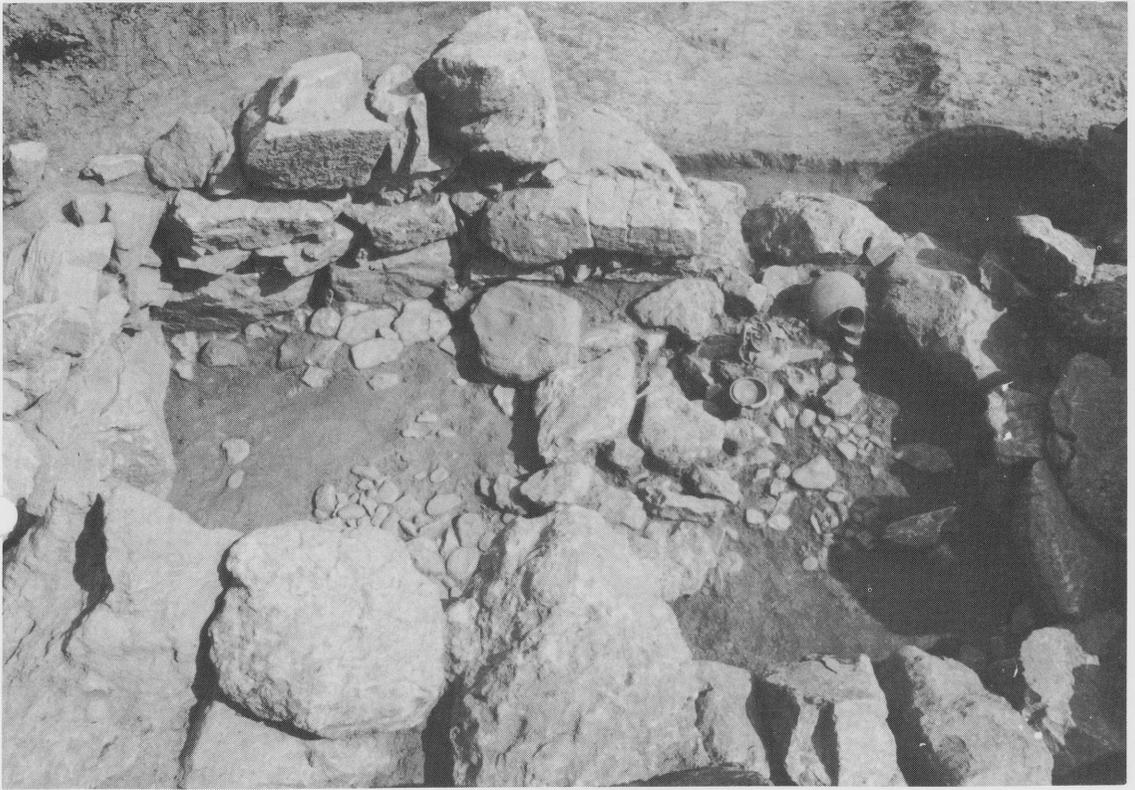
2. 古墳全景(南西から)



2. 石室 全景 (北から)



1. 石室 全景 (南から)



1. 玄室全景(西から)



2. 玄室内遺物出土状態



1. 玄室内耳環出土状態



2. 玄室内玉類出土状態



1. 奥壁石積み状態



2. 東側壁石積み状態



1. 玄門から羨道部近景(北から)



2. 羨道東壁石積み状態



1



2



4



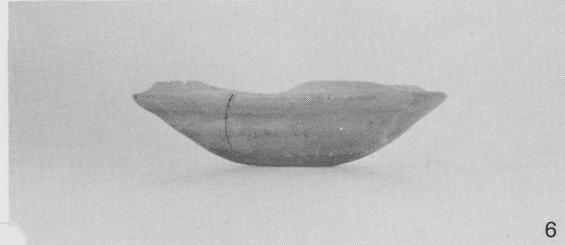
14



5



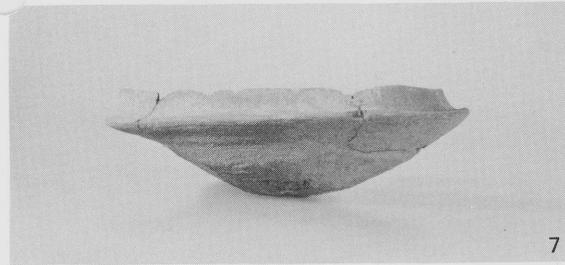
15



6



12



7

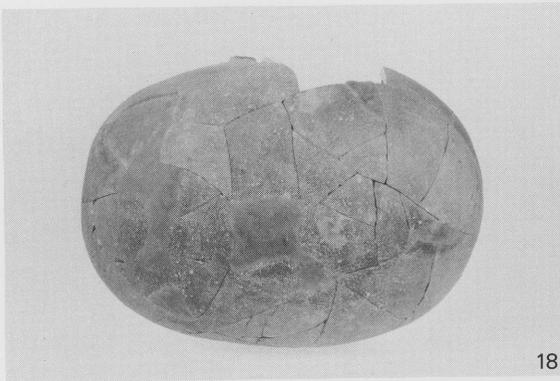


13



8

出土土師器・須恵器



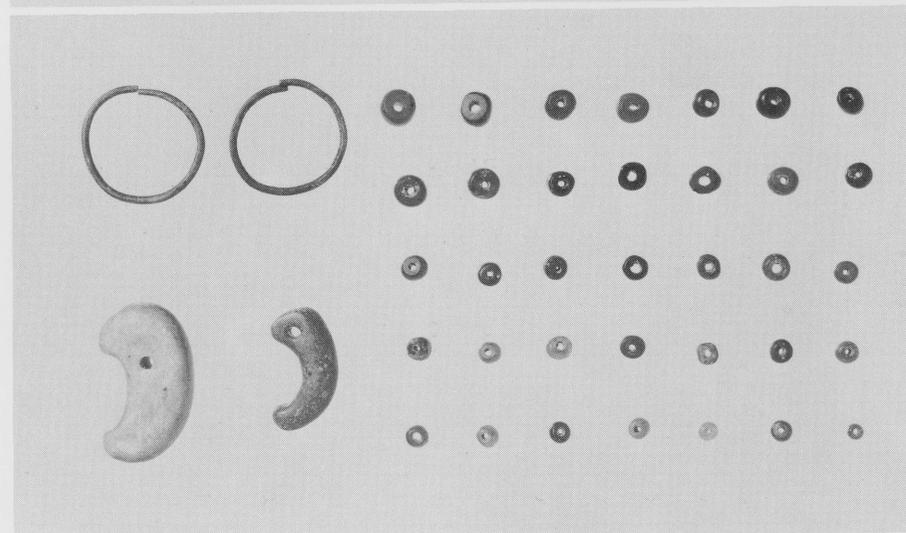
18



19

18・19
須恵器

鉄器



装身具

ヲシガ浦古墳

須恵町文化財調査報告書

第 1 集

昭和57年3月31日

発 行 須 恵 町 教 育 委 員 会
福岡県粕屋郡須恵町大字上須恵1180-1

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号